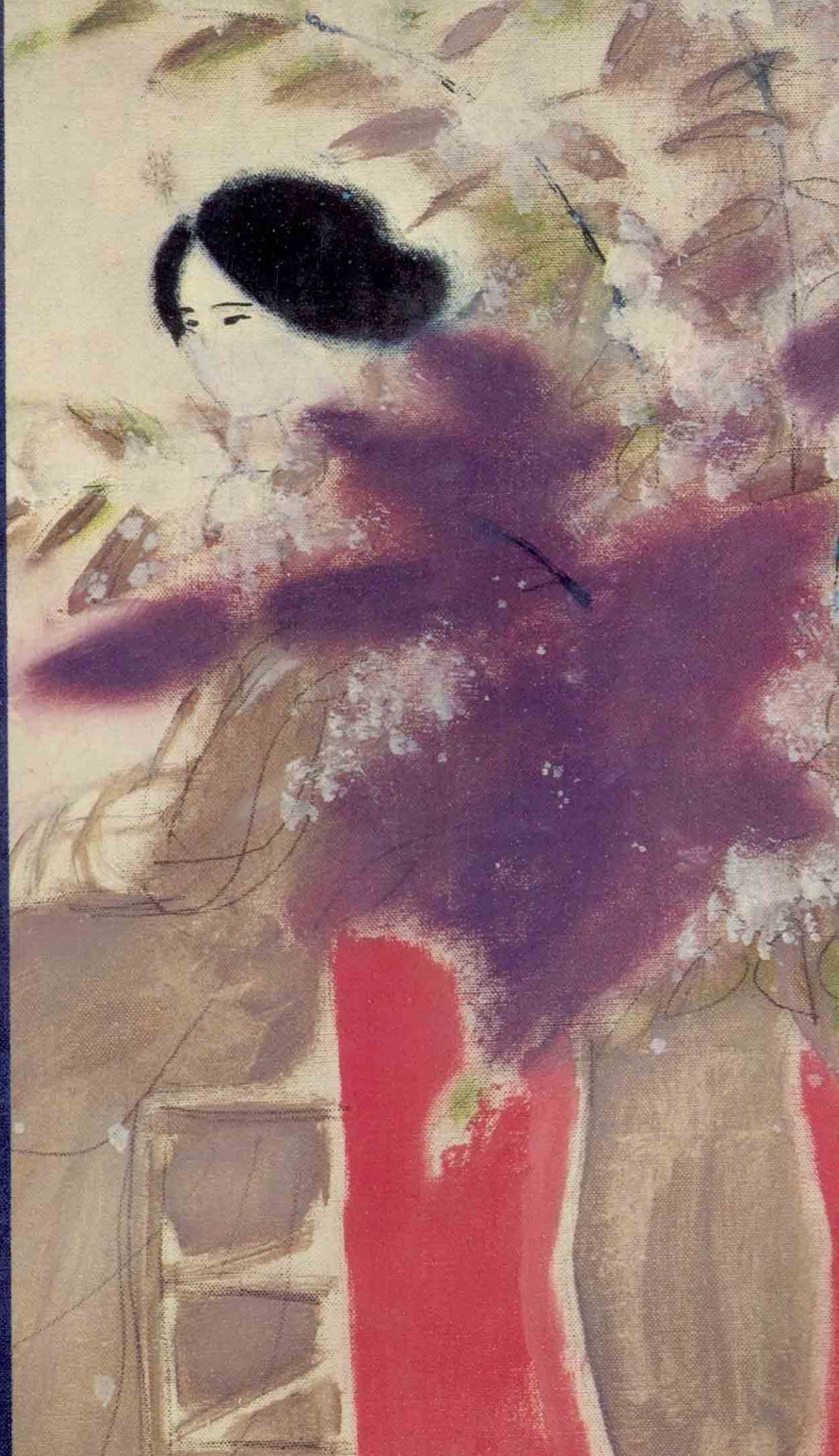


女の肖像

芝木好子



女の肖像

芝木好子

新潮社版

女の肖像おんな
しょう
ぞう

昭和五十四年十一月十五日 発行
昭和五十五年一月二十日 三刷

定価 八〇〇円

著者 芝木好子しばき
よこ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式會社 新潮社

〒102 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部 東京 03 三六二一三三
編集部 東京 03 三六二一三三
振替 東京 四一八〇八番

印刷所 二光印刷株式會社
製本所 神田加藤製本

© Yoshiko Shibaki, Printed in Japan. 1979

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

女の肖像—目次

第一章	黄	水	仙
第二章	初	仕	事
第三章	銀	座	暮
第四章	愛	の	渦
第五章	立	つ	鳥
第六章	画	廊	の
第七章	薰		女 ^{ひと}
第八章	海	の	庭
第九章	別	れ	の
	風		景

187	165	142	119	97	75	51	29	7
-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	---

装
幀
ブ
ラ
ジ
リ
エ

女の肖像

第一章 黄水仙

春の気配の濃い、明るい朝だった。自然のままの庭にも黄水仙が咲きはじめている。牧子は庭に出て二、三輪の花を鋏で切りとった。通りすがりの若い男が低い金網越しに立止って、
「きれいに咲きましたね」

と声をかけた。近頃はどの家もブロック塀をめぐらして他人にのぞかれないようにしているが、牧子のところは庭の風情からして楡の大樹のほかは野草が伸びているような、あるがままの姿だった。それでも花の手入れは怠らなかった。

「黄水仙、匂いますのよ」

「こちらは、しもつけ草が咲いたり、彼岸花の群落があったり、なかなかまで紅葉したり、いつも愉しませてもらっています」

「かまわない庭ですのに、どうも」

牧子がそう言うのと、若い男は眩しそうに彼女を見て、

「絵をお描きですか。弟さんとよく庭に出ていられるのをお見かけしました。ほくも絵は少し描

きます」

そう話しかけたが、すぐ不躰に気付いたように顔を赤らめて、失礼します、というそばを離れていった。牧子より三つ四つ年下の感じのよい青年である。彼女はいま絵を描いていない。友達達のグラフィック・デザイナーのところへ時折手伝いにゆくだけである。そのうしろめたさのせいか青年の前で明るい言葉は交せなかった。ペラングへ戻ると、学生服の駿一が硝子戸のところに立っていた。上背の伸びた、髪濃い十八歳の彼を仰いで、弟さんか、と眺めると、わらいがうかんだ。駿一もむろん聞いていたに違いない。黄水仙を食卓に飾ると、部屋がやわらいだ。駿一はミルクを一杯のんでから時計をみて、出かける時間を計っている。家においても落着かないだろう、今日は大学入試の発表の日であった。

「庭で言葉をかけていった男ね、よく家の前を通るよ。気がつかなかった？」

「そういえば、見たかもしれないわ。杏の実の時」

「杏の実をほくらが取る時、地べたに落ちたのを拾ってくれたね。絵描きの家に興味があるのかな。ほくは弟でもかまわないけど」

「今度訂正しておくわ」

「今日、お母さんうちにいる？」

と駿一は聞いた。

「もちろんよ。電話をくれるでしょう、待っているわ」

この一年間、ふたりで頑張ってきたのだから、受験の結果を分ちあうのもふたりでなければならぬ。駿一はよくやったから大丈夫と思うが、駄目でも責めることは出来ないと牧子は思った。彼女が今日まで暮してこられたのは駿一のおかげだし、彼の受験の支えになれたのもよかったと

感じていた。駿一は玄関へ出ていった。牧子は感慨をこめて、

「いつていらっしやい」

と言ひ、彼はちよつとふりむいて頷いた。青年らしさと少年の面影とがまじりあつて、緊張した表情が若々しい。今日の難関を過ぎれば、別の人生がひらけるだろう。あの子は落着いて出ていった、いや、なにかに堪えるような表情だった。男の子が一度は試される関門に立っていると思うと哀れをおぼえた。いずれにしろ小学六年生の日から今日まで、どうやら彼の母親の役をとめたが、これで自分の役目もそろそろ終りだろうかと思つた。玄関を出ていった駿一の上背のある後姿が、夫の高秋にだぶつて見えてくる。

フランスにいる高秋から少し前にきた手紙はまだ駿一に見せていなかった。発表が終つて落着いてからでなければ見せるわけにいかなかった。高秋はフランスへ一年の予定で出かけて、三年に近い。パリから南仏へ移つて手紙も間遠になったが、ニースから久しぶりにきた便りは彼女には辛くこたえた。

（地中海の風景も一向自分に近づいてきてはくれないのだ。もつと遠くへ行く必要がありそうだ。そう思つて準備している。帰国の予定は今のところまったく立たない状態だから、君も自由になつてもらいたいと思う。まだ若いのだから。駿一にしても大学生と呼ばれるようになれば、一人でやつてゆけるだろう）

彼はそう書いてきた。嘗て日本の著名な画家が最初に渡欧した時、残した妻へ、どうか自由になつてほしい、と手紙を書き送つたのは有名な話だが、その画家は体よく妻を離別して、その後フランスのモデル女と再婚したのだった。牧子は高秋の手紙からも同じ匂いを感じないではない。放任な彼が一人ではずはなかったし、ニースでのそれらしい噂も伝わってき

ていた。彼は妻と子をやさしい言葉で捨てようとしている。

夫が蒸発したのも同然の家の中で、牧子は駿一の大学へ着く時間を計りながら、庭を見ていた。見知らぬ若い男に庭先で声をかけられても、胸をさわがすこともない虚ろさの中にいた。庭の真中に門から玄関への石道が伸びている。初めて高秋のアトリエを訪ねたのは、絵の仲間たちと一緒にだった。小さなグループ展の案内をかねて、武蔵野に近い川津高秋のアトリエへ来ると、左右の庭は初夏の野草が伸びていて美しかった。アトリエの雰囲気は乱雑と静謐がまざったおかしな感じで、画架のカンバスの描きかけの絵は青と灰色だった。牧子は仲間の強烈な色を見馴れていたから、大人の絵に惹かれた。仲間は男が三人、女が二人で、リーダーの永さんは高秋と面識があった。画家は永さんの絵しかしらなかったが、パンフレットに描いた安見修の絵に目をとめて、「この絵を描いたのは、誰」

と聞いた。べつに褒めもしなかったが、画家の注意を惹いただけで安見は表情を明るくした。安見の絵のよさは実物でしか分らない、と牧子は思ったが、画家の目の確かさがうれしかった。彼女は安見のためになにか言いたくてたまらなかった。画家は妻を亡くした男と聞いていたが、なるほど一人住いだった。部屋がちらかっているだけ気楽さがあって、画家の言う通りに冷蔵庫をあけて飲物を出したりし、打解けた楽しい時を過ごした。

「お嬢さんたち、君たちは彼らのためにモデルになるのか」

と画家は興味ありげにたずねた。小坂タマコが、

「さあ、まだ一ぺんも頼まれませんが」

「裸婦を描こう、なんて言ったら、どやされちゃうな」

永さんが言う、と、牧子と小坂タマコは顔を見合せて、

「一べん言つてごらんなさいよ。交換条件を出して、ミケランジェロのダビデの像とそっくりに描いてあげるから」

小坂タマコの声に合わせて、わつと笑いが湧いた。牧子はさつきから画家が自分の顔をみつめていのに気付いた。やがて賑やかな時間が過ぎて帰る時、安見と牧子は並んで門を出た。すぐ牧子はノートを忘れたことに気付いた。忘れ物が一つの運命に繋がるとは思ひもしなかった。引返すと、画家が出てきてノートを手渡しながら、

「土曜日の午後、一人でいらっしゃい」

と言つたのだつた。彼女はなんと返事をしたのか、気がつくと思ふと扉をすりりと出てきていた。若い女にとって一まわりも年上の魅力のある男の誘いは媚薬のような力で迫ってくる。牧子は不安を感じながらも惹かれて、足を向けずにいられなかった。一人前の女の分別を持っているつもりだつたし、自分をたのむ気持もあつたが、最初の訪問の夜から男の熟した情熱に巻かれるように、身心を奪われた。しばらくして気がつく、壁にかかつた青い絵が彼女の顔や腕を染めそうに倒れこんでくる。その日から魔に憑かれたようにアトリエへ忍んでいった。

ある日も短い時を過したあと、庭で茗荷みぎうがを摘んでいると、低い門から少年が入ってきた。彼女は顔をあげて、

「どなたですか」

とたずねたが、子供の顔に見覚えがあつた。どこで見たのだろう、ととまどっていると、

「ほく、駿一です。父はいますか」

と少年は聞いた。子供の顔と画家の顔を重ねるおどろきで、彼女はまじまじと見た。額のひろい、くっきりした眼許が似ている。それが駿一との初対面であつた。画家に子供がいる、という

衝撃はそのあとにきた。

画家は牧子へのおもわくで、突然に現われた息子をどうしてよいか分らずに、懨然としていた。子供に向つて、

「なにか用か」

と聞いたりする。子供はなにもかも分つていて、父に氣の毒そうな目を向けた。ふだん取つきにくい父がかえって気安く思えたのだった。子供が加わると、奔放な画家はなすすべもなく、勝手の違った顔をした。牧子は帰りそびれたので、蕎麦を茹でて、茗荷を薬味にして二人にたべさせた。親子が黙って蕎麦をつるつるやっているさまは、なんとなくおかしかった。牧子は騙されたと思いたくなかったし、少年の行儀のよさを救いにして眺めていた。祖父母の許にいる少年は、そば猪口ちよこをおくと、牧子へはに cand 笑みをうかべて礼を言つた。

「駿一さんは、何年生？」

「六年生です」

「背が高いのね。大きい方でしょう」

「真中より少し高いくらい」

牧子はしばらくして帰り支度をはじめた。駿一はおどろいて、

「どこへ帰るの？」

と聞いた。牧子を新しい家族と考えはじめていたのだった。この出会いは彼女にも駿一にも高秋にも、ふしぎな巡り合せと言わなければならなかった。彼女は今もそう思った。

電話のベルが鳴った。牧子はどきりとして、受話器の前へ走っていった。電話は駿一ではなく、永さんからだった。

「ああ、びっくりした。あなただったの」

「まだ何も言わないうちに驚くとはね」

「駿一が大学へ試験の発表を見に行っているのよ」

「おふくろ業もなかなかやるね」

永さんは感心したが、すぐ別のことを告げた。

「安見がヨーロッパを廻って、足かけ五年ぶりに帰ってきた。いずれ個展をやと思うけど、そのうち集まろうか」

「そう、安見さん帰ってきたのね。きつと一まわり大きくなっているでしょうねえ」

「あまり太っていないんじゃないか。元々痩せて頬に肉のない男だし」

永さんはわざとはぐらかしたが、声はうれしそうに弾んでいた。

「電話で、みんなの仕事のことを盛んに聞いていたっけ」

「皮肉ね。仕事のことを聞くなんて」

「小坂タマコは結構張切ってたぞ。君もおふくろ業を切上げなよ」

そう言うと、永さんは電話を切った。牧子は帰ってきた安見に会いたいと思わなかった。イタリーの国際絵画展に入賞した安見を、仲間と見なすわけにいかない気がした。いや、まだ友情という名で繋がっているなら皮肉だと思った。

しばらくして電話のベルがまた鳴った。駿一の声がする。牧子は祈るように耳を傾けた。

「発表、どうだったの」

「ああ、合格だった」

「合格ですって。よく聴えないわ。合格なのね」

牧子は感情的に声を上ずらせると、しぜんに臉が熱くなった。よかった、と思いながら、これで飯の母と子も終りがきた、と感じた。すると自分のしてきたことが何もかも間違いに思えてきた。

「すぐ帰っていらっしやい、駿」

「友達と会うから、遅くなるよ。あとがつかえているから、じゃあ」

駿一の声がぶつりと切れた。興奮を隠しきれない彼の声が、あたりを憚っていた。電話の行列にも運、不運の隣り合せがあるのかもしれない。牧子は深い息をした。男に捨てられた妻と息子がどうやって生きてゆくか、それはまだ分らなかったが、一つの区切りがきたと思った。

兄の住む処は渋谷の高台のマンションである。兄を訪ねるのは久しぶりで、日曜日でないといけないから牧子は思い立って出かけてきた。駿一の入学が決ると、次に迫ってくる問題がある。兄の住いはベランダから広い居間にかけて観葉植物が飾ってあって、嫂の美奈子の丹精である。兄の宏吉は銀座の外れの京橋に近いビルディングの四階に歯科医を開業している。彼は牧子がたずねてゆくと、珍しそうに見ながら複雑な表情をうかべた。気の重い、心配なものが来た、という目である。

「牧子はいいつも同じ服を着てくるな」

肉親の反対を押しきって一まわりも年上の再婚の画家の許へ走った妹を、このさまだ、と眺めた。夫に三年も置き去りにされて、生さぬ仲の息子を抱えて暮してゆく妹を、並みの気分で迎え